

第3巻1号 2021年3月

秀明大学看護学部紀要

Journal of Faculty of Nursing

実践報告

診療の補助技術における学生の能動的学修を促進するための教育方法の検討

稲野辺奈緒子・村中 陽子・小松 妙子

 秀明大学看護学部

Shumei University Faculty of Nursing

 実践報告

 秀明大学看護学部紀要
 P.21-28 (2021)

 診療の補助技術における学生の能動的学修を促進するための教育方法の検討
 Examination of Teaching Methods to Promote Active Learning in Nursing Skill
 Course for Medical Assistance
稲野 辺 奈 緒 子¹⁾

Naoko Inanobe

村 中 陽 子²⁾

Yoko Muranaka

小 松 妙 子²⁾

Taeko Komatsu

要 旨

看護教育において主体的に学ぶ態度の育成は重要な課題の一つである。医療支援技術の教育においては、予習—講義・演習—復習のパターン学習を繋ぐ役割を持つ教材として、ポートフォリオを中心に Nursing Skill、iPad、事例課題を導入した。本研究は、その教育効果を評価し、今後の技術教育の質の向上を目指すことが目的である。研究協力に同意を得た学生 32 名の無記名自記式質問票を分析対象とした。その結果、ポートフォリオ作成の程度の高群 (n=18) と低群 (n=14) の間に、動機付けを示す ARCS-V の注意「t (30) =3.00, p<.01」、関連性「t (30) =2.50, p<.05」、意思「t (30) =2.19, p<.05」に有意差が認められた。ポートフォリオ作成の程度が高い学生はパターン学習に能動的に取り組んでおり、学習への動機付けを高めることが示唆された。今後は、ポートフォリオ作成の有用性や意義を十分に理解できるように教示方法を検討する必要がある。また、各活用教材の ARCS-V の平均値に差が見られ、高値であったのは事例課題、低値であったのは iPad であり、活用方法の検討の必要性が示唆された。

キーワード：診療の補助技術、能動的学修、ポートフォリオ、教育効果

Key Words：Nursing Skill、Active Learning、Portfolio、Educational Effect

I. はじめに

大学教育では現在、学生が生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材の育成が求められ、従来の知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生間で相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修 (アクティブ・ラーニング) への転換が必要とされている¹⁾。よって、教員は学生の「認知的、倫理的、社会的能力」を引き出せるような授業展開の工夫が求められ、学生は「事前準備、授業受講、事後展開」を通し、主体的に学修を進めていくことが求められる。

このような背景を受け、看護基礎教育でも能動的学修の促進のために e ラーニングと教室での学習を統合したブレンディッド型授業^{2) 3) 4)}、授業前・後での課題内容の変更⁵⁾、等のように様々な教授方略が展開されている。そこで、学生の「生活援助技術」及び「医療支援技術」の学修目標達成状況を概観したところ、継続的な能動的学修への動機づけを高めることが必要と考えられ、学生がやりがいを持って取り組めることをねらいに「予習—講義・演習—復習」といったパターン学習の展開を 2019 年度前期「生活援助技術」より実践した。

その結果、先行する「生活援助技術」では、予習の段階では自己学修が進まない学生が多かった状況に対し、復習の段階では自己学修を進めている学生の割合が上昇したことから⁶⁾、2019 年度後期「医療支援技術」では、予習で出される事前課題に対し、学生が能動的に学修を進められるような教授方略と、予習—講義・

 1) 東京女子医科大学看護学部
1) *Department School of Nursing, Tokyo Women's Medical University*

2) 秀明大学看護学部

2) *Faculty of Nursing, Shumei University*

演習—復習のパターン学習を繋ぐ役割を持つ教材導入の必要性を認識した。予習—講義・演習—復習のパターン学習を繋ぐ教材について教員間で検討した結果、学生は日々の学修成果が可視化され、それらが積み重ねられていくことによって達成感を抱き、次の学修の動機付けになるのではないかと判断から有効と考えたのが、ポートフォリオの導入である。ポートフォリオは、日々の学修成果物を一元化し、学生自身の看護実践、到達度、成長、評価などの一連の学修プロセスが、自己にて確認できるツール^{7) 8)}であり、パターン学習を繋ぐ教材として適していると判断した。

さらに、医療支援技術は、経管栄養、膀胱留置カテーテル、静脈血採血、口腔・鼻腔内吸引など、生活援助技術に比べて技術内容が巧緻で複雑であるという特性がある。

そのため、医療行為としての技能だけではなく、対象の安全（生命の尊重）と安楽、倫理的配慮を総合的に捉え、科学的根拠に基づいて思考・判断する能力の育成が必要と考える。ポートフォリオによって、学修成果物を一元化していくことは、学修プロセスが見えるイコール、学生の思考・判断・行動が見えることにも繋がる。その実現のためには、学生が学修成果を可視化することに伴い、能動的学修を促進するような学修内容や教材の充実を図る必要があり、事例を通した学生間の協同学修と、自己の看護実践を省察的に観察できるよう iPad を活用した体験学修も導入した。

以上のように、新たな教授方略を取り入れることによって、学生の能動的学修を促進し、看護実践能力を主体的に修得できることを予測し、授業を計画し運営したので報告する。

II. 研究目的

ポートフォリオ導入による学生の能動的学修の教育効果を評価し、今後の技術教育の質の向上を目指す。

III. 授業の概要

1. 学修の流れ

本科目はひとつの単元を、「1. 予習 2. 授業活動（講義・演習） 3. 復習」の3段階のパターン学習とした。

2. 教材の活用方法

本科目での教育方法として、次の4つの教材を活用した。

1) Nursing Skill

看護技術のオンライン教育ツールとして学内で導入されている ELSEVIER 社の「Nursing Skill」を活用した。Nursing Skill は手技を映像で確認できるため、学生は看護技術に対するイメージが図りやすいこと、何度も繰り返し視聴が可能であること、留意点や重要事項が明示されているといった利点があり、各単元の予習から復習までの一連の流れの全てにおいて視聴することを推奨した。また、インターネット環境で、スマートフォン・タブレット・パソコンから、いつでもどこでも確認でき学生にとってはアクセスしやすいツールであることが特徴である。

2) iPad

学生が行う看護実践を iPad で撮影し、その後、学生間で自己の看護実践を省察的に観察する体験学修を導入した。体験学修とは「体験と振り返りを通した能力（知識、技能、態度）の更新^{9) 10)}」とされている。よって、学生が自身の看護援助を客観的に振り返ることは、技術の知識や手順等だけでなく目の前の患者にとって、その技術の意味を考えていくことができると考えたため導入した。

3) 事例課題

本科目では対象の安全と安楽、倫理的配慮を総合的に捉え、科学的根拠に基づいて思考・判断する能力の育成を目指すことから各技術に事例課題を設定した。設定された事例に対するアセスメント、看護実践の実施、実施後の振り返りを通して、学生の知識・技術・態度の統合を図ることを狙いとした。

4) ポートフォリオ（課題ワークシートへの記述とファイリング）

本科目では、ポートフォリオ作成の具体的方略として、予習、授業活動、復習の流れを通し「課題ワークシート」を單元ごとに作成し、それらをファイリングするよう促した。学生が記述するメリットとして、「思考の整理に役立つ⁸⁾」ことから、課題ワークシートを見返した際に省察できるのではないかと考えた。

課題ワークシートの構成は、各技術の手順や根拠の基礎知識に関するシート、発展的学修のための事例課題に関するシートを準備した。それらのシートには、学生自身が調べた点、気付いた点、振り返った点を追加記述できるようにした。

3. 授業の展開方法

本科目において基本とした授業の展開方法を図1に

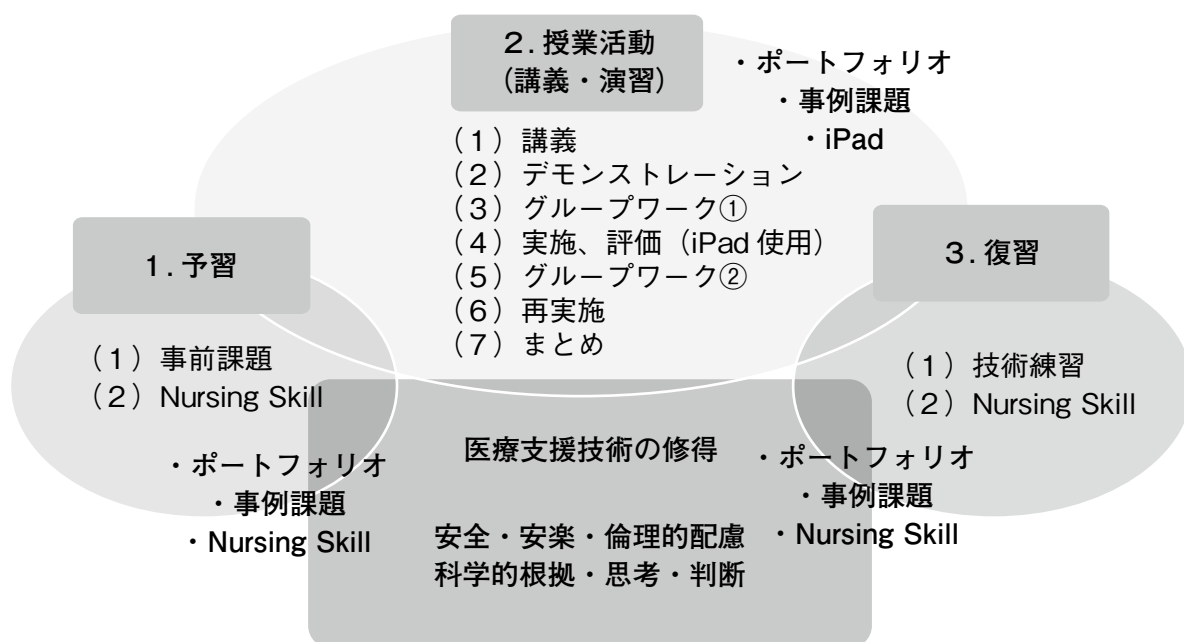


図1 本科目において基本とした授業の展開方法

示す。

1) 予習

(1) 事例課題：次回、学修予定の看護技術に沿った事例課題を提示する。学生は設定された患者のアセスメント、援助方法について記述してくる。

(2) Nursing Skill：実施する看護技術の映像や説明を視聴・学修の上、イメージを図る。

2) 授業活動（講義・演習）

演習では、1ベッド三人の学生を配置し、適宜、学修状況を確認しながら单元毎にメンバーチェンジを行った。一人の教員は2～4ベッドを担当した。

(1) 講義：各技術の基本・重要事項、根拠等と一連の流れについて説明した。

(2) デモンストレーション：巧緻性の高い技術箇所を中心に、教員が担当ベッドの学生にデモンストレーションを行った。

(3) グループワーク①：予習してきた患者のアセスメント、看護実践方法を基に各ベッドメンバーで、実施する援助方法、留意点、患者への声かけなどを中心に検討した。教員はラウンドをしながら助言、指導を行った。

(4) 実施・評価 (iPad 使用)：3人がそれぞれ看護師役、患者役、観察者役となる。看護師・患者役は、それぞれ役割を演じ、観察者役の学生はiPadで撮影した。

(5) グループワーク②：1回目の看護実践が終了

したら、3人で疑問が残った点、うまくできなかった点などを抽出し、それらを中心にiPadで撮影動画を再生の上、改善点を検討した。その際、技術の正確性、看護師の動き、患者の反応など総合的に振り返るよう促し、再実施に向けた方針を見出せるように支援した。

(6) 再実施：それぞれ役割を交代して再実施した。

(7) まとめ：教員は、全ての学生が看護師役を実施後、残った疑問、課題だと感じた点を即時にフィードバックし、今後の学修・課題内容の明確化を図った。

3) 復習

①技術練習：ポートフォリオを参考に、個人学修とした。

②Nursing Skill：ポートフォリオを参考に、個人学修とした。

IV. 研究方法

1. 調査対象

調査対象は、2019年度後期「医療支援技術」授業の履修学生32名である。

2. 調査期間・方法

調査期間は2020年2月最終授業終了後である。

調査方法は学生に研究趣旨、協力依頼内容及び、倫理的配慮を文書と口答で説明した。その後、調査票を配布した。

3. 調査内容

調査内容は、以下の通りである。

1) 能動的学修の動機付けについて

John M. Keller による ARCS-V 動機づけモデル¹⁰⁾¹¹⁾を参考に学習意欲を「Attention：注意」「Relevance：関連性」「Confidence：自信」「Satisfaction：満足感」「Volitional：意志」の5要因から把握した。調査内容には、それぞれ活用する4つの教材に関する質問項目を反映させ、ARCS-Vの5要因に対し「とてもそう思う」「そう思う」「あまり思わない」「まったく思わない」の4件法で回答を得た。

2) ポートフォリオ作成の程度について

ポートフォリオ作成の程度は3項目より把握し、調査内容は、①事前課題ワークシートの記述、②授業・演習・グループワーク内容の記述、③復習での追加記述について、「記述した」、「まあまあ記述した」、「あまり記述しなかった」、「記述しなかった」の4件法で回答を得た。

3) 授業前後の自己学修状況について

授業期間中の自己学修の実施状況に対し「かなりやった」「まあまあやった」「あまりやらなかった」「やらなかった」の4件法により回答を得た。また、「まあまあやった」「あまりやらなかった」「やらなかった」と回答したものについて、やらなかった理由を選択式と自由記載で回答を求めた。

4. 分析方法

能動的学修の動機付け、ポートフォリオ作成と活用の程度、授業前後の自己学修状況の変数について記述統計を行った。その後、動機付けと学修状況の関連を見るためにポートフォリオ作成の高低群の2変数間の平均値の差の検定（Mann-Whitney の u 検定）を行った。また、自由記載については、内容分析を行った。分析には、SPSS Ver.20 を使用した。

5. 倫理的配慮

研究協力依頼は、本科目の成績評価終了後に実施した。研究協力への同意は自由意思であることを伝え、協力の有無に関わらず学業等への不利益は一切被らないことを説明した。質問票の回収は看護学部棟内にある鍵付きボックスへの投函により回収した。なお、本研究の実施は秀明大学研究倫理委員会の承認（承認番号：19E008AC）を得てから実施した。

V. 結果

研究協力が同意が得られた32名（有効回答・回収率100%）を分析対象とした。

1. 能動的学修の動機付け [表1]

ARCS-Vの5要因20項目の全体平均値(±標準偏差)は2.9(±0.7)であった。5要因のうち、学びへの動機付けを示す3要因の平均値は、注意2.8(±0.7)、関連性3.1(±0.6)、自信2.8(±0.7)であり、満足感と学習の継続意思を示す2要因の平均値は、満足感2.9(±0.7)、意思2.9(±0.8)であった。

1) 教材別の能動的学修の動機付けについて

本科目で活用した4つの教材別における動機付けの平均値は、次の通りである。

(1) Nursing Skill

Nursing Skillの活用では、注意「事前学修することによって、授業・演習に興味を持った」3.2、関連性「授業内容の理解に役立った」3.4、満足感「学修をやったよかった」3.2と、「3点/そう思う」以上であった。一方、自信「自信が持てた」は2.7であった。

(2) iPad

iPadの活用は、注意「技術演習は面白いと思った」2.3、関連性「技術の振り返りに役立った」2.5、自信「学ぶことがはっきりした」2.5、満足感「できたという実感がわいた」2.3、意思「学修課題が明確になった」2.6と、すべての要因において、3を下まわった。

(3) 事例課題

事例課題の導入は、注意「好奇心をそそられた」3.2、関連性「現実的に学修内容を考えられた」3.4、自信「患者と関わるイメージがもてた」3.2、満足感「できたという実感がわいた」3.1、意思「考えるべきことがわかった」3.2と全ての要因において、3以上であった。

(4) ポートフォリオ

ポートフォリオの作成に関しては、注意「学修成果をまとめることは新鮮だった」2.6、関連性「学修成果を記述することは将来役に立つと思った」3.2、自信「やりがいがあった」2.8、満足感「今後の学修に役立つと思った」3.2、意思「自分なりの学修計画を立てられた」3.0であり、注意と自信の2要因が3を下まわった。

2. ポートフォリオ作成の程度 [表2][表3]

ポートフォリオ作成の程度は、授業前に「記述した」53.1%、「まあまあ記述した」37.5%で、計90.6%

表1 ARCS-Vの得点

(n=32)

項目	平均値±標準偏差		
注意	2.8	±	0.7
Nursing Skillで事前学修することによって、授業・演習に興味を持った	3.2	±	0.6
iPadを使用した技術演習は、面白いと思った	2.3	±	0.6
各技術に事例設定があることで、好奇心をそそられた	3.2	±	0.6
(ポートフォリオ) 1冊のファイルに、学修成果をまとめることは新鮮だった	2.6	±	0.7
関連性	3.1	±	0.6
Nursing Skillでの学修は、授業内容の理解に役立った	3.4	±	0.7
iPadの使用は技術の振り返りに役立った	2.5	±	0.7
各技術に事例があることによって、より現実的に学修内容を考えられた	3.4	±	0.6
(ポートフォリオ) 課題・授業資料に、学修成果を記述することは将来役に立つと思った	3.2	±	0.6
自信	2.8	±	0.7
繰り返しNursing Skillで学修することによって、自信が持てた	2.7	±	0.6
iPadで自分達の技術を撮影することによって、学ぶべきことがはっきりした	2.5	±	0.7
各技術に事例があることによって、患者と関わるイメージがもてた	3.2	±	0.6
(ポートフォリオ) 自分流のファイルを作成することは、やりがいがあった	2.8	±	0.7
満足感	2.9	±	0.7
Nursing Skillでの学修をやってよかった (n=31)	3.2	±	0.7
iPadで撮影した動画を振り返ることによって、できたという実感がわいた	2.3	±	0.7
各技術に事例があることによって、できたという実感がわいた	3.1	±	0.7
ポートフォリオとして作成したファイルは、今後の学修に役立つと思った	3.2	±	0.8
意志	2.9	±	0.8
Nursing Skillでの学修を、継続して取り組めた	2.9	±	0.9
iPadで撮影した動画を見ることによって、学修課題が明確になった	2.6	±	0.8
各技術に事例があることによって、考えるべきことがわかった	3.2	±	0.7
ポートフォリオを作成することによって、自分なりの学修計画が立てられた	3.0	±	0.7

表2 授業前・中・後におけるポートフォリオ作成の程度

調査項目	人数 (割合: %) n=32				平均値 ±標準偏差
	記述した	まあまあ記述した	あまり記述しなかった	記述しなかった	
授業前課題ワークシートは、記述しましたか	17 (53.1)	12 (37.5)	2 (6.3)	1 (3.1)	3.4±0.7
授業中、演習やグループワーク内容は記述しましたか	17 (53.1)	13 (40.6)	1 (3.1)	1 (3.1)	3.4±0.7
授業後の復習で、追加記述はしましたか	7 (21.9)	9 (28.1)	12 (37.5)	4 (12.5)	2.6±0.9

の学生が記述したと回答した。授業中の作成程度は、「記述した」53.1%、「まあまあ記述した」40.6%で、計93.7%の学生が記述していた。しかし授業後は、「記述した」21.9%、「まあまあ記述した」28.1%、計50%と大幅に減少していた。

また、ポートフォリオ作成の程度とARCS-Vの関連をみるため、授業前・中・後の3項目をそれぞれ「記述した」「まあまあ記述した」「あまり記述しなかった」「記述しなかった」の4段階評価した合計点(3~12)を個別に算出した。その結果、平均値(標準偏差)は9.4(±2.0)であった。ポートフォリオ作成の程度

と学修への動機付けに差があるのかを確認するため、作成程度の高低群を、中央値10を境に2群に分類したところ高群18名(56.2%)、低群14名(43.7%)に分けられた。

その結果、表3に示す通り、ポートフォリオ作成の程度の2群間比較(高群, 低群)では、注意(3.0, 2.6)、関連性(3.3, 2.9)、自信(2.9, 2.6)、満足感(3.1, 2.8)、意思(3.1, 2.7)と全てにおいて高群が高かった。高群と低群の間で有意差が見られたのは、注意「 $t(30)=3.00, p<.01$ 」、関連性「 $t(30)=2.50, p<.05$ 」、意思「 $t(30)=2.19, p<.05$ 」であった。

表3 ARCS-Vとポートフォリオ作成の程度の高低群による得点と標準偏差

	高い群 (n=18)	低い群 (n=14)	t値	p値
	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)		
注意	3.0 (±0.3)	2.6 (±0.3)	3.00	0.005*
関連性	3.3 (±0.5)	2.9 (±0.4)	2.50	0.018**
自信	2.9 (±0.5)	2.6 (±0.4)	1.94	0.062
満足感	3.1 (±0.7)	2.8 (±0.4)	1.49	0.147
意思	3.1 (±0.6)	2.7 (±0.4)	2.19	0.037**

t検定 *:p<.01 **:p<.05

3. 授業前後の自己学修状況 [表4]

授業前後の自己学修状況に関する調査では「かなりやった」「まあまあやった」「あまりやらなかった」「やらなかった」の4件法で回答を求めた。その結果「かなりやった」2名(6%)、「まあまあやった」24名(80%)、「あまりやらなかった」6名(20%)であり、「やらなかった」はいなかった。そのうち「かなりやった」

と回答した2名を除外し、自己学修をやらなかった理由の回答を選択式と自由記載で求めた。学生が自己学修をやらなかった理由として選択した回答は「他の科目の課題が大変だった」21名(66%)、「他の科目の試験勉強が大変だった」16名(50%)、「空いているコマがすくなかった」14名(44%)が上位の理由であった。

表4 授業前の自己学修の程度について (n=30)

まあまあやった	24 (80)
あまりやらなかった	6 (20)
やらなかった	0 (0)
やらなかった理由 (複数回答可) 人数: 割合%	
1. 他の科目の課題が大変だった	21 (66)
2. 他の科目の試験勉強が大変だった	16 (50)
3. 空いているコマが少なかった	14 (44)
4. 計画的に課題に取り組めなかった	7 (22)
5. パイトの予定を入れすぎた	4 (13)
6. 自己学修の意義を感じなかった	3 (9)

VI. 考察

本研究は学生の能動的学修を促進するため、ポートフォリオの導入を中心に科目内の教育方法と活用教材の検討をしてきた。

その結果、約9割の学生が授業前・中のポートフォリオ作成に取り組み、約5割の学生が授業後のポートフォリオ作成に取り組んでいたことが明らかになった。さらに授業前後の自己学修においては、約9割の学生が「かなりやった」「まあまあやった」と回答していることもあり、授業前後でかなりの学生が主体的に学修できていたと言える。

一方、ポートフォリオ作成の程度が低い学生が半数近く存在した。その背景に考えられたのは、ポートフォリオの教示方法にあったと推測された。教示方法は、科目の開始・中間時に目的、方法を口答にて説明した。中間時においては、優れたポートフォリオのサンプル例をスライドで提示しながら口頭で説明をした。だが、口頭で行った教示は一時的なものであることから、学生の理解を十分に促すものではなかった可能性があった。同時に、ポートフォリオの使用範囲が、本科目受講中のみであると理解していた可能性が考えられた。ポートフォリオの作成は、他の科目の学修にも関連して役立つといった、その多様な有用性を理解できるような働きかけも併せて必要ではないかと考えられた。活用を開始する際には、学生にガイドラインを明示することの重要性も提唱されており¹²⁾、本研究結果において、ポートフォリオ作成の有用性や継続意義を十分理解できる教示方法の再検討と強化の必要性が示唆された。

次に、学生の能動的学修の動機づけに関し、ARCS-V 動機付けモデルで捉えた結果、学習意欲を動機付ける3要因の平均値は、注意2.8、関連性3.1、自信2.8、満足感と学習の継続意思を示す2要因の平均値は、満足感2.9、意思2.9であり、中でも注意と自信は低値であった。このことから看護技術科目における学生の興味や関心、探求心を刺激する教材や学修課題の設定、同時に学修課題に取り組むことで自信が持てるような教育方法をさらに工夫する必要性が示唆された。

また各要因の項目には本科目内で活用した教材に関する内容が反映されており、iPadの活用が全要因にて低値であった。iPadの活用が低値であった原因として、一つにはiPadで撮影を行った順序性が考えられる。本科目では学生3人がそれぞれ看護師役を順番

に行い、撮影は1回目に看護師役となる学生の看護実践のみとした。しかし、医療支援技術が巧緻で複雑な技術項目であったことから、最初に看護師役を行った学生が戸惑う場面もあり、観察者役の学生、または教員の助言を必要とした場面も見受けられた。そのため、ところどころで看護実践が中断されてしまい、患者への対応も含めた一連の流れにおける体験学習が十分に達成されなかったことも要因として考えられる。

次に、時間の確保が問題として考えられた。iPadを活用して、看護実践で困難・不明点などを焦点化し確認を促したが、看護実践自体に予定以上の時間を要してしまうグループもあり、振り返りの時間が十分でなかったグループもあった。今後は、撮影する順序の変更、体験学習を効果的に促進するため、時間配分等の修正を行いながら授業を展開していく必要性が示唆された。

他方、ポートフォリオ作成が高群の学生は、低群の学生と比べてARCS-V 動機付け方略の平均値が全要因において高いことが明らかとなり、方略に対し肯定的であったと言える。本科目では、先行科目で展開されていたパターン学習を継続して取り入れたが、パターン学習をしている者ほど自己調整学習、授業評価が高いとの見解もあり⁶⁾、元々の学修傾向が高いことも考えられた。しかし、本科目では、パターン学習をより促進するための教材を検討した上でポートフォリオを中心にNursing Skill、iPad、事例課題を導入した。中でも、ポートフォリオは学修成果物を一元化するに留まらず、内容を見返すことによって単発的な「知」であったものを結びつかせる役割も持ち合わせている。つまり、それまで知識として知っている段階であったものが、実践としてどのように行為するかといった思考となり、総合的に物事を捉えていけるようになると言われて^{13) 14)}。本科目では、予習段階で各技術の基本的知識を学び、授業活動では事例課題を通し、総合的な能力の向上を目指すよう設計していたこともあり、上述したポートフォリオの役割が効果的に機能したと推測される。

加えて、スキル・職能などの総合的な能力の向上を学修の到達目標とする場合には、学修者の目指すことに直結していることの方が内発的な動機付けが獲得されやすいと言われている¹²⁾。本科目の開講時期が基礎看護学実習Ⅱ(看護過程の展開)の直後であったことから、対象のイメージ化の促進、総合的に捉えることの重要性、そして看護専門職を目指すといった目標

によって、内発的動機づけの獲得がなされていたとも推測される。事実、動機付け方略の一つである事例課題の項目に関しては、質問項目全てにおいて平均値が3.1以上と高値であったことから、基本的知識だけではなく、より実践的で応用性のある学修を求めていることも示唆された。

Ⅶ. 今後の展望と課題

今回、本研究では、学生の能動的学修を促進するための方略として、学生の教材活用方法に着目し授業設計を行った。しかし、学生の能動的学修を促進するためには、学生に関わる教員の指導スキルやファシリテータースキルの質的担保も重要な課題だと考えられる。

特に現在、看護系大学の増加に伴い、様々な経験を持つ教員がいる中、各教員の経験を最大限に活かし、教育の質を高めるための方略は喫緊の課題である。今後は、教員の指導スキル向上のためのプログラムの検討などが課題だと考える。

Ⅷ. 結論

医療支援技術の教育において、予習－講義・演習－復習のパターン学習を繋ぐ役割を持つ教材として、ポートフォリオを中心に Nursing Skill、iPad、事例課題を導入した。その結果、8割を超える学生が授業前後で自己学修できたことが明らかになった。さらに、ポートフォリオ作成の程度が高群の学生は、動機付けも高くすべての要因において、動機付けの平均値が低群よりも上回っていた。また、各活用教材の ARCS - V の平均値に差が見られ、高値であったのは事例課題、低値であったのは iPad であり、活用方法の検討の必要性が示唆された。

謝辞

本研究にご協力頂きました学生の皆様に深く感謝申し上げます。

本研究の研究結果の一部は、第40回日本看護科学学会学術集会にて発表した。

謝利益相反の開示

本研究における開示すべき COI はない。

引用文献

1) 中央教育審議会 (2019.12.3)：新たな未来を築

くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申), 平成 24 年 8 月 28 日 < <http://www.mext.go.jp/component/b-menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/shryo/attach/1247211.htm> >

- 2) 三宮有里, 村中陽子, 熊谷たまき他：主体的な学習活動の促進に向けたブレンディッド型授業の実践とその評価, 医療看護研究, Vol.10, No1, 45-51, 2013
- 3) 村中陽子, 熊谷たまき, 服部恵子他：看護技術学習科目に ICT を活用した授業運営システムとその評価, 医療看護研究, Vol.7, No1, 53-58, 2011.
- 4) 山住康恵, 櫻井美奈, 中村昌子他：ブレンディッドラーニングを用いた基礎看護技術の授業を試みて：ベッドメイキングの単元を事例として, 共立女子大学看護学雑誌, Vol.5, 26-34, 2018.
- 5) 今村圭子, 山口さおり, 中俣直美他：基礎看護技術における学生の能動的学習方法の転換へ向けての支援の取り組み, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, Vol.26, No1, 115-121, 2016.
- 6) 小松妙子, 村中陽子, 稲野辺奈緒子, 村越望, 田村かおり, 戸田すま子：学生の能動的学修及び思考・判断の自己表現を促す看護技術教育の検討, 秀明大学看護学部紀要, 第2巻1号, 35-44, 2020.
- 7) 中井俊樹, 小林資：授業方法の基礎, 第1版, 医学書院, 2017.
- 8) 鈴木敏恵：ポートフォリオ評価とコーチング手法, 医学書院, 2006.
- 9) 高橋平徳, 内藤知佐子：体験学習の展開, 医学書院, 2019.
- 10) 鈴木克明：インストラクショナルデザインの道具箱, 北大路書房, 2016.
- 11) John M. Keller：学習者の意欲を刺激する：看護学教育に活かす ARCS-V 動機付けモデル, 日本看護学教育学会誌, Vol.22, No2, 79-90, 2012.
- 12) 松崎邦守, 北條礼子：ポートフォリオを教授ツールとして活用する授業設計の検討, 日本教育工学会論文誌, 31 (1), 69-77, 2007.
- 13) 前掲, 8), 14-19.
- 14) 岡田満：医学教育におけるポートフォリオ, 近畿大医誌, 第35巻2号, 77-82, 2010.